は　じ　め　に

本報告書は、平成８年９月 26 日に国立国語研究所第二会議室で開催された国立国語研究所第４回国際シンポジウム・第３専門部会の全記録である。分担者・協力者及び当日お招きした方々、総勢 32 名で懸案事項について検討を加えた。非公開のかたちをとったのは、これからの国語教育の課題について、根本のところを腹蔵なく話し合いたいという意図・願いによっている。

この第３専門部会は、前年の第３回国際シンポジウム「世界の言語教育・日本の国語教育」の検討内容を継承すると同時に、文部省科学研究費補助金（創成的基礎研究費）による「国際社会における日本語についての総合的研究」（代表：水谷修）の中の教育チームの活動の一環として開催された。

本報告書を刊行するに辺り、第３専門部会にご出席し、熱心に検討くださった参加者の方々にお礼を申し上げたい。本報告書に見られるように、日本の国語教育のあり方について、幅広い見地から、沢山の見方や考え方を提示していただいたのである。

実は、私どもは、文字化した録音資料を、発言者にお送りして、推敲をお願いした。それは、それぞれのご発言が意にそまぬ表現にとどまっていることを恐れたからである。幸いに、ご協力を得て、読みやすい表現・言い回しになっていると感謝いたしている次第である。

そういうお願いを早々にいたしておきながら、申しわけないことに、この報告書は、ほぼ１年遅れで刊行することになった。遅滞したことについて、深くおわびを申し上げたい。

この教育チームは、後ろに掲げる組織に明らかなように、所外の研究者の力なくして成立しない。所内の者はコーディネーター的な役割を果たし、所外の者の調査研究に負うところが大きい。更に、分担者・協力者だけでも十分な視野の確保が困難であって、どうしても、各方面の識者をお迎えしなければならない。

私どもは、前年度刊行した報告書『国語教育の改善に向かって』（平成８年７月）の続編の刊行も予定している。何人もの識者のお話や話合いを集積しているからである。ひとまず、この第３専門部会の記録を刊行するのである。

この教育チームの事務連絡及び録音の文字化作業、そして、本報告書の編集作業等については、平成７年度松吉奈緒、平成８年度福富七重、平成９年度大塚薫、福富七重の各氏のご協力を得た。また、第３専門部会当日は、福富七重、篠崎佳子、大塚薫、藤川美穂の各氏のご協力を得た。以上、記して感謝を申し上げる次第である。

最後に、私どもは、本報告書が、広く読まれて日本の言語教育に何らかの貢献を果たすことを念じている。

平成９年７月１日

教育チーム代表　・　甲　斐　睦　朗

第３専門部会「国語教育と日本語教育の統合的研究」出席者

氏　名	所　属
相　澤　秀　夫	文部省初等中等教育局中学校課・高等学校課教科調査官
秋　吉　恵理子	都立国際高校英語科教諭
足　立　祐　子	新潟市国際交流協会
鮎　澤　孝　子	国立国語研究所言語教育研究部
今　泉　郁　夫	東京学芸大学附属高校教諭
岩　見　宮　子	国際日本語普及協会
上　野　田鶴子	東京女子大学現代文化部教授
氏　原　基余司	文化庁文化部国語課国語調査官
太田垣　明　子	大阪インターナショナルスクール
甲　斐　睦　朗	国立国語研究所日本語教育センター長
甲　斐　雄一郎	筑波大学教育学部系講師
上　谷　順三郎	岩手大学教育学部助教授
工　藤　真由美	横浜国立大学教育学部助教授
小　森　　茂	文部省初等中等教育局小学校課教科調査官
佐　藤　　透	文部省海外子女教育課海外子女教育専門官
杉　本　泰　夫	ＮＨＫ日本語センター企画開発部長・チーフアナウンサー
スコギンズ千枝	サンモール・インターナショナルスクール日本語科主任
関　口　明　子	国際日本語普及協会
高　木　まさき	横浜国立大学教育学部助教授
田　中　孝　一	文部省初等中等教育局中学校課・高等学校課教科調査官
寺　井　正　憲	千葉大学教育学部助教授
棚　橋　尚　子	群馬大学教育学部講師
中　洌　正　堯	兵庫教育大学教育学部教授
中　野　佳代子	財団法人国際文化フォーラム事務局次長
西　川　寿　美	昭和女子大学文学部講師
西　原　鈴　子	国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部
二　谷　貞　夫	上越教育大学学校教育学部教授
野　村　敏　夫	文化庁文化部国語課国語調査官
花　島　健　司	板橋区立志村第四小学校教諭
浜　本　純　逸	神戸大学発達科学部教授
細　野　二　郎	前教科書センター研究主幹
水　谷　　修	国立国語研究所長
安　　直　哉	岐阜大学教育学部助教授
柳　澤　好　昭	国立国語研究所日本語教育センター推進企画研究官
吉　野　　文	千葉大学文学部
米　田　正　人	国立国語研究所情報資料研究部